

# 暮らす旅 京都 誌上で疫病退散!

文・写真／松岡伸吾(暮らす旅舎)



四条大橋の上で神輿を清める神官。写真／高嶋克郎 (studio BOW)

海の家がない、生まれて初めての鎌倉の夏景色。すっきりした景観は悪くないが、海水浴まで禁止となると、行政の管理能力の限界。オリンピック開催など夢のまた夢と思う。

この夏、祇園祭の神輿渡御や山鉦巡行も新型コロナウイルスの感染防止のためにとりやめとなった。戦中戦後の一時期は別にして、悪天候でも中止されなかったのに、恐るべしコロナ禍。だが祇園祭そのものがなくなったわけではない。もともと平安時代、疫病退散のために始まった祇園祭は、7月ひと月を通じて、様々な神事が行われる。祭を支える祇園の氏子組織である宮本組のメンバーによれば、観客を集めない形で行われるという。

暮らす旅舎の本『水の都 京都』(実業之日本社)では、祇園祭の中でも重要な神事である神輿洗いを取り上げた。これは神輿渡御の前に、鴨川から汲み上げた神用水をかけて神輿を清め、水の神様を迎えるというもの。7月10日夕刻、宮本組を先導に、大松明を運ぶ神輿会の行列が八坂神社を出発する。大きな竹の松明の炎で四条大橋までの四条通りを浄めたあと、いったん八坂神社に戻り、次は3基ある神輿の中で素盞鳴尊すさのおのみことを祀った中御座1基を飾りのないまま四条大橋まで持ち出し神輿洗いの神事が行われる。その後八坂神社に戻り、飾り付け。17日の山鉦巡行の後、神輿渡御が行われ、28日の神輿洗いが終わると、神輿は蔵に収納される。

思えばこの取材をきっかけとして一昨年からは神輿洗いを寿ぐ祝い提灯に参加するようになった。山鉦巡行に比べるとあまり知られていない神輿洗いだ、大松明は迫力満点。子供も参加するお迎え提灯も楽しい。ぜひ来年はご覧あれ。



長さ6メートルもある大松明を運ぶのは中御座の神輿を担ぐ三若神輿会の面々。



宮本組が常に神輿洗いの行列を先導する。



鷺踊の子供も参加するお迎え提灯の列。



祇園の有志が江戸時代の祝い提灯を復活。